

『ジェネラリストのための内科診断リファレンス —エビデンスに基づく究極の診断学をめざして』

酒見 英太(監修), 上田 剛士(著)

[評者] 福井大病院教授・総合診療部 林 寛之

これだけのボリュームを一人で書きあげるなんて驚愕の事実! なにしろこれでもか、これでもかとコンパクトにエビデンスが書き連ねてある。

特筆すべきは症候学や疾病各論のみならず、日本の現状に合わせたテラーメイドな解説が微に入り細に入り記載されていることだ。エビデンスというと、どうしても『『では』の神』(アメリカでは～、アメリカでは～)となってしまうところだが、多くの海外の論文を参考にしながら、日本で医療をしていくにはどうしたらいいのかがきちんと書いてある。また単純に事実の羅列にとどまらず、上田剛士先生による「解釈」が入っており、『生きた』知識になっている。大学教授が机上でこねくり回した机上の知識じゃないのがいい。……って大学教授が言っちゃっていいのかしらん??

上田先生の単著によるところが何より素晴らしい。グタグタと長ったらしい記載が一切なく、わかりやすい。紙面も見やすく、エッセンスをギュッと詰めた感じでありながらも、単著ならではの統一性があり読みやすい。本書を上梓するまで7年かかったというが、血と涙と努力の結晶ということがすぐにわかる。上田先生の日頃からの勉強姿勢に頭の下がる思いだ。

特に日本のさまざまな場において、専門医研修を積んでいる後期研修医に、ぜひ本書をお薦めしたい。忙しさにかまけてどうしても経験則的な診断や治療に陥りがちな落とし穴にはまらないためにも、世界

のスタンダードはどうなっているのか、エビデンスとしてはどこまでわかっていることなのかを確認しつつ臨床をこなしていくと、必ず血や肉となって力がついてくる。病院の徒弟制度もそれはそれで力がついていいが、世界に目を向けて勉強する姿勢は本書から学ぶことができる。その道標を上田先生が示してくれるとも言える。まさしく本書にさらなる新しいエビデンスを後期研修医自身が書き加えて、自分の臨床にあったデータベースを歳月をかけて作り、本書と共に成長していくことができる。近年まれにみる良書だ。

内科にとどまらずマイナー科や整形外科、産婦人科にも言及している点で、まさしく総合的に役立つ書と言えよう。当直で専門外を見ないといけない当直医にとっても十分役に立つ。初期研修医なら勉強会の資料作りに役に立つし、各分野の専門医なら自分の専門領域の知識の整理のみならず、自分の不得意とする分野の復習、さらなる勉強に非常に役に立つこと請け合いだ。とにかく紙面は読みやすく、専門医の貴重な時間を無駄にはしない満足のリファレンスになっている。ぜひ一度手に取ってみてほしい。簡単に通読できる厚さではないが、それ以上の見返りが必ずあるはずだ。

● B5 / 頁 736 / 2014 年 / 定価: 本体 8,000 円 + 税

[ISBN978-4-260-00963-8] 医学書院刊